

クラシック音楽を
もつと気軽に
楽しんでほしい

読売日本交響楽団正指揮者の下野竜也さんは、鹿児島市出身の41歳。準備段階で楽譜の読み込みを徹底して行い、作曲家の意図を忠実に表現する下野さんの手腕は、国内外で高く評価されている。最近では世界的指揮者・小澤征爾さんの代役に抜てきされ、注目を集めたことも記憶に新しい。今年の夏には、霧島国際音楽祭の演奏会でもタクトを振る。下野さんに、指揮者を目指すまでの経緯や霧島国際音楽祭の見どころ、鹿児島への思いなどについて話を伺った。

読売日本交響楽団正指揮者

下野 竜也さん

Tatsuya Shimono

指揮者になろうと思った きっかけを教えてください

小学5年生のとき、トランペットを吹いている先生が授業で楽器を見せてくれたことがあります。きらきらと光る高級なおもちゃみたいで、かっこいいなあと思いましたね。それから、器楽部でトランペットを吹くようになりました。

「指揮者」を初めて意識したのは小学6年生のとき、MBCジュニアオーケストラ(現MBCユースオーケストラ)に入団してからです。同じ曲でも指導する先生によって教えることが違いますし、同じ曲のレコードでも、指揮者によって演奏は異なります。指



霧島国際音楽祭

揮者が演奏者に影響を与えるんだ、面白いなと思い始めました。ただ、音楽を生業なりひにしようとは思いませんでした。歴史が好きで、学校の先生になりたかったんです。それでも、指揮者は子どもの頃の僕にとつてのアイドルでしたから、友達が野球選手に憧れるように、指揮者に憧れていました。

自分は指揮者になりたいんだとはつきり意識したのは大学入学後。入部したオーケストラのサークルでは東京から招いたプロの指揮者に指導をお願いしていたのですが、彼らの存在感や技術に圧倒されました。強烈な印象でした。それから指揮の勉強をする方法を探し始めました。

クラシック音楽を通して 観客に何を伝えたいですか

クラシック音楽は難しく、堅苦しいものと思っておられる方は多いと思います。でも、だからこそ「クラシック」なんです。日本の伝統芸能みたいなものですよ。能や歌舞伎に詳しくなくても、生で観るとその素晴らしさは伝わるし、日常と違う雰囲気圧倒されますよね。「堅苦しいな」と感じることも含めて楽しんでみたらどうでしょう。少しおめかしして、普段と違う空気に触れてみるのも面白い体験になると思います。見た目の好き

な演奏家を見つけたり、気に入った音楽が流れたら、CDを買ってみたり。楽しみ方は人によって千差万別です。

音楽の魅力は言葉では語り尽くせません。強いて言えば、私たちの言葉にできない気持ちや代弁してくれるのが音楽ではないかな。慰めになったり、力をくれたりもする。人によって好きな音楽のジャンルは違いますが、どんな音楽も私たちの心の隙間を埋めてくれる存在だと思っています。

鹿児島は昔から部活動としての吹奏楽が盛んですが、最近は社会人の吹奏楽団も増えているようですね。仕事を持つ人たちが週末に集まり、音楽を続けていくのはすてきなこと。鹿児島の文化が成熟している証だと思います。

霧島国際音楽祭の 見どころは

霧島国際音楽祭の魅力は多種多様なクラシックを一度に聴けることです。ピアノも声楽もオーケストラもあるから、たくさん選択肢から好きなものを選んで、気軽に聴きにきてほしい。生で聴くのはいいものです。バイオリン一本でもすごい迫力です。

7月28日に宝山ホールで行われ



るキリシマ祝祭管弦楽団公演には、日本を代表するチェリスト・堤剛つとむらさんとベルリンフィル第一コンサートマスターの榎本大進かじもとさんが出演されます。このお二人と一緒に演奏する機会がはめつたにありません。僕も指揮台の上で演奏を聴くのを楽しみにしています。

音楽祭では「吹奏楽指導者のためのワークショップ」もやります。僕と同級生で教員をやっている人は多いのですが、彼らとかが一緒に音楽をやっていたという接点を生かして、鹿児島への恩返しができるかと思っています。教育の現場は孤独なものです。普段先生方がなかなか人に聞けないことを皆で集まって勉強し、その成果を現場に返していけば先生も子どもたちもハッピーになると思います。企画しました。こういう講習会では僕が教えてもらうことも多いんです。鹿児島でのこうした活動は今後も続けていきたいと考えています。